

イタリヤ的自由人

——石鍋真澄教授退任に寄せて——

喜多崎 親

石鍋真澄教授は、一九七九年に成城大学短期大学部の専任講師となられてから、四十一年間、成城大学に籍を置いて来られた。私が同じ芸術学科の同僚として、身近に接していただいたのはそのうちわずか十年に過ぎない。自分の話から始めて恐縮このうえないが、私は二〇一一年に成城大学に赴任するまで、石鍋先生とは面識がなかった。もちろん、それまでも多くのご著書に接していたし、学会等で一度見たら忘れられない眼鏡と髭のお顔は存じ上げていたが、専門分野も異なり、お話しする機会はなかった。しかも、私が採用される時には、石鍋先生は研修でフイレンツェに行かれていて、着任後の四月になってから初めてお会いしたのである。石鍋先生にしてみれば、「どこの誰？」というところであつたらう。なにしろ年齢も十歳上で、高名な先生のことなのでこちらはお会いするまで緊張していたが、最初の邂逅は偶然だった。共用研究室で行き会って事務の人に紹介されたのである。その時の先生の反応は「あ、石鍋です。よろしく」みたいな気さくな感じだったと記憶している。

大学においては先輩の教員は上司ではないが、ともに仕事をしていく上でその性格は死活問題である。石鍋先生はこの第一印象の通り、気さくで、表裏のない、そして何より自由を愛する人である。

「自他共に認めるイタリア狂です。」この言葉ほど石鍋先生の特質を捉えている言葉はない。休みとなれば、まるで実家に帰るようなニュアンスで「ちよつとイタリアに行つてきます」。お子さん達に、イタリアの名前をつけた有名なエピソードをここで改めて記す必要はないだろう。私も数多くの西洋美術史の研究者を見てきたが、これほどア・プリオリに研究対象となる国が好きなる人を他に知らない。これはとても幸福なことだ。

そして先生は、そのイタリア愛を、惜しみなく周囲と共有する。同僚となつてから、私の世代やもつと若い世代のイタリア研究者で、出身校や専門を超えて石鍋さんを慕っている人がとても多いことを知った。このことはまたご著書の何冊かを読めば更にはつきりするだろう。なにしろ『ありがとうジョット』というタイトルのご著書があるくらいなのだから。

しかし、これは石鍋先生が学問的な厳密さを追求することと矛盾しない。私は卒論面接や学会発表の感想などで、意外なほど厳しい意見を述べる先生も知っている。そしてそれは、重箱の隅をつつくような細かいことではなく、方法論に対するこだわりであったり、膨大な知識と経験に裏打ちされた大局的な批判だった。石鍋先生は、これまでに留学だけでなく、研修などで何度か長期にイタリアへいらしているが、驚くのはそのたびに一冊の本を書かれることである。概説的なものも多数あるが、『ピエロ・デッラ・フランチェスカ』は博士論文になった。成城大学の研究成果刊行助成金を得た『フィレンツェの世紀 ルネサンス美術とパトロンの物語』や『教皇の都市ローマ ルネサンスとバロックの美術と社会』も新しい問題意識が明確な内容である。

そしてこれは、多くの本を出されていることと関係すると思うのだが、実務的で仕事が早いのである。研究科

長時代に、あっといふ間に文学研究科の院生室に予算を取って、設備を一新したのはその最も明確な例だろう。

最後にやはりパフォーマンスともいえる、石鍋先生のスピーチにも触れておかないわけにはいかない。学科の懇親会などでは、教員のスピーチの最後を飾るのはいつも石鍋先生である。それは長くなりがち、ということもあるが、やはり独特の身振り手振りを交えた、抜群のパフォーマンス性にあるのだろう。その後では他の教員はかすんでしまう。それはとても言葉で書き表せないが、今年たまたま文芸に入学したある教員の娘さんが、全学部対象の文芸講座で「今日、すごい人を見た」と興奮して話したのが、ほかならぬ石鍋先生のことだったというのに集約されている。

しかし私が今でも鮮烈に覚えているスピーチは、美術やイタリアについてや学生の将来に対する教訓などではない。そのとき石鍋先生はこう話を始められた。「僕が幸せだと思うのは、これまで生きてきて一度も戦争で殺されそうになったり、人を殺したりしないですんできたということです」。美術を愛し、イタリアを愛し、自由を愛する石鍋先生の根本に、こうした時代への感謝があったのだ、とその時思った。そして他ならぬ自分もその恩恵に浴していることに改めて気づかされた。

石鍋先生、長い間ご苦労様でした。残念ですが、来年からは二年生の実習旅行の帰りに、近鉄奈良駅のそばでいっしょに柿の葉寿司を買うことはできないのですね。先生はこれからますます自由です。いつまでもお元気でイタリアに旅行され、ときどきはまた成城にもいらしてください。